

新刊紹介

◇天台緣起論展開史

佐々木憲徳著

從來天臺の法門が實相論とのみ呼ばれてその緣起論的法理の面が閉却されてゐるのに對し、天臺教學の展開は緣起論的方面に終始一貫して顯著なものが存してゐるとの著者の意企による論述である。

全篇を第一期十二緣起依準の時代と第二期眞如緣起採用の時代に分ち、さらに前後に亘つて區劃を設け天臺教學に於ける緣起思想の様態を分明にしてゐる。尙末尾に索引と著者の英文序とが附録せられてゐる。(二八年一〇月刊・A5一五九頁・二五〇圓・永田文昌堂)

◇大無量壽經聽記

曾我 量深著

本書は去る昭和廿三年度の安居講録である。「開講のことば」に述べられた如く、無明によつて三界に限りなき生死流轉を重ね、出離之緣なき我々衆生は釋迦出世本懷の教たる大無量壽經によつての

み曠劫にも遇ひ難き彌陀弘誓の強緣に遇ふ事を得てこの得がたき人生を眞に意義あらしめることが出来る。祖聖親鸞は、本願成就の名號は正しく我々を招喚して肘節の到來を告げる佛の御催促であり、彌陀の本願は我々各自の自覺に於て南無阿彌陀佛と我身の上に成就するものである事を發見された。この發見の事實に就ての驚きと歡びと、それに對する我心の疑謗の罪と懺悔とが所謂信の一念である。(二八年一〇月刊・A5三〇五頁・六〇〇圓・丁子屋書店)

◇我が國民間信仰史の研究

堀 一郎著

本書は我國の民間信仰を歴史的に究明したと言ふより、山伏、御師、念佛者、巫女、特殊な乞食僧等、要するに遊行者風、或は漂泊者風の俗ヒジリの發生経路をたどり、それらの民間信仰について庶民の信仰心理を考察したものである。そしてその根底には民衆が山中に他界を觀念して來た信仰並に靈界から神が郷土を來訪すると見た信仰等が流れて居る事、又山岳信仰や淨土信仰等の佛教がよく日

本人一般のものとなり得た所以等を知る事が出来る。(二八年一〇月刊・A5七六六頁・一、七〇〇圓・創元社)

◇慈雲尊者梵本註疏英華

慈雲尊者百五十年遠忌奉讀會編

慈雲尊者の百五十回忌に當り、遠忌奉讀會が結成され、尊者の遺徳を顯揚し、その學績を世に紹介するため刊行されたものである。收めるところは、一、梵籙三本(普賢行願讚、般若心經、阿彌陀經)二、梵學津梁卷第四十、三、自受用、四、理趣經講義三卷のみであるが、尊者の梵學研究が如何に偉大であつたかをうかがふに充分である。解題並にその英文は夫々石濱純太郎博士、長尾雅人博士が擔當されたものである。(二八年一〇月刊・非賣品)

◇起信論入門

武邑 尙邦著

百華苑文庫(九)として出版された小冊子で、古來佛教を學ぶものが、一度は必ず研學する起信論を著者は著者なりに

先哲の意見を聞きながら本論を読み、その読み方を、(一)信仰と生存……(九)起信論の立場の九項目の中に述べられ、最後に起信論研究の展望を附記して研學者に便宜をあたへてゐる。(昭和二八年八月刊・175×115cm・一四〇頁・一三〇圓・百華苑)

◇唯識學研究 上卷 教史論

深浦 正文著

唯識教學の全野を綜合せんとして、本研究がなされ、それを教史と教義の二面に分ち、本書はその教史を取扱ふ上卷である。全篇を印度、中國、日本に分ち、教會史的消息を辿り、更にそれに湛へられる各々思想の教理史的發達を究めることにその企圖がある。(昭和二九年一月刊・A5四二八頁・七五〇圓・永田文昌堂)

◇眞宗教學の中心問題

曾我 量深著

戰時中著者が鹿兒島別院で行つた講義の聞書である。眞宗教學の中心問題、は救済と自證の問題であり、佛の救

済を内容とする淨土眞宗の教へは救済を契機として佛の自覺に到達するものである。佛教を釋尊に始まる特殊宗教と見る見方は佛教の一面を見るに過ぎず、佛法は釋尊に先立つて本來法爾に存在することを明らかにするものが大無量壽經である。佛教は法藏菩薩の四十八願を以て根源とし、法藏比丘の選擇した念佛は法藏に先立つてある。念佛は法藏が創出したものではなく、法藏自ら人間として宿業に悩み、衆生の宿業を荷負して、實踐を通して感得されたものである。彌陀の本願は佛自身に無關係に衆生を救ふものではない。従つて救済とは我々各自が法藏菩薩の自覺に倣することである。(二八年一月刊・B6・一四三頁・一五〇圓・眞人社)

◇日本佛教の開展と

その基調 (下)

谿 慈弘著

本書上卷は、日本天臺と鎌倉佛教、就中、淨土教學及び日蓮教學との關係に關する論文を蒐めたものであつたが、下卷は叡山佛教、特に中古天臺慧檀兩流の學

と信仰とを究明したものであつて、その中には口傳法門の種々相、天臺教義の特色、實際信仰、即ち記家成佛、聲明成佛、彌陀命息等が含まれ、著者の研究の成果がまぎ／＼と見られる。末尾に日本天臺の典籍解題及び索引を附し、勉學に便ならしめて居る。(二八年四月刊・A5三七〇頁・四五〇圓・三省堂)

◇眞宗教學史研究

大原 性實著

眞宗教學史の諸問題中、第一等は、願生論の開闢として特に願生思想の問題を取扱い、三業惑亂を背景とする所謂「信願交際」の論議の開闢の迹を追つてゐる。第二卷は、眞宗行論の開闢として眞宗行論としての念佛の教義的展開を述べ、更に最近論議の的になつてゐる宗教と社會的實踐の問題を取擧げて眞宗行と社會的實踐の次元の相連並びにその關係等について論じてゐる。又附録「教行信證撰述年時の問題」では、歴史家によつてなされてゐる論議に對して宗學者の立場からこの問題について見解を述べてゐる。そして元仁元年撰述説、八七頁へ

鹿野秀正（長野）
 首藤靜雄（新潟）
 大森 怜（滋賀）
 杉浦俊丸（北海道）
 中戸義賢（新潟）
 三島弘康（北海道）
 關 信明（大分）

原 義昭（岐阜）
 日野道允（茨城）
 廣 眞一（滋賀）
 藤 井 浩（兵庫）
 藤川隆丸（滋賀）
 藤津誓三（福岡）
 細川蘭教（福岡）

瀧谷 彰（奈良）
 武内了眞（滋賀）
 武田廣昭（新潟）
 常宮諦成（福井）
 中西堯昭（北海道）
 島山秀憲（石川）

細川敦春（香川）
 美濃順也（石川）
 森川 泥（滋賀）
 八木文昌（新潟）
 矢鳴泰之（福岡）
 吉田法純（北海道）

七五頁より續く 歸洛後撰述説及びその折衷

説、更には信巻別撰説の中、元仁元年撰述説を採り、撰述順序も教巻より順次製作せられ元仁元年に一應完成されたと見ている。（第一卷二七年六月刊・三〇五頁・三八〇圓、第二卷二八年一月刊・二八八頁・四五〇圓・A5・永田文昌堂）

◇法華版經の研究

兜木 正亨著

中世以降に於ける我國開版の版經の中、法華の版經は當時法華信仰が我國佛教の主流をなしてゐた關係上、すこぶる多く、従つてこれが究明は我國印刷文化史上に於ても大きな課題であつた。著者は羅什譯法華經の古寫經や中國、朝鮮の

古版經の中には我國現行本法華經と部分的に本文の相違する傳本の多いことに疑問を抱き、法華版經に就て全國的に遺品を調査し、中國、朝鮮の法華版經と我國のそれとは系統を異にし、現行法華經は春日版法華經の本文を繼承するものであることを立證した。圖版三〇枚を附す。（二九年一月刊・B5二五八頁・二〇〇圓・平樂寺書店）